濾胞性歯嚢胞と歯牙腫が共存した1例

福士智之・田中純一・小川 透
加賀谷保・辻村昌子・鈴木 貢

A case of follicular dental cyst associated with odontoma

Noriyuki FUKUSHI・Junichi TANAKA・Toufu OGAWA
Tamotsu KAGAYA・Shoko TSUJIMURA・Mitsugu SUZUKI

Abstract: Follicular dental cyst associated with odontoma is relatively rare. We encountered an 84-year-old male with a follicular dental cyst associated with odontoma in the right mandible. The cyst included the crown of an impacted tooth (21).

The odontoma was classified as compound odontoma. The cyst and odontoma were removed under local anesthesia. The postoperative course was uneventful. In the infrared spectro-analysis, it was suggested that calcification of the odontoma was less than that of the impacted tooth.

Key words: follicular dental cyst(濾胞性歯嚢胞), odontoma(歯牙腫), infrared spectro-analysis (赤外線分光分析)

緒 言

顎骨中に発生する濾胞性歯嚢胞と歯牙腫が共存したという報告は比較的まれである。今回著者らは、右下顎臼歯部に濾胞性歯嚢胞と歯牙腫が共存した興味ある1例を経験したので報告する。

症 例

患 者: 84歳 男性。

初 診: 平成元年8月

主 訴: 右下顎臼歯部違和感。

既往歴および家族歴: 特記事項なし。

現病歴: 平成元年8月 343 ブリッジ脱落のため某歯科医を受診。X線診査にて右下顎臼歯部の透過像を指摘され、精査のため弘前大学医学部附属病院歯科口腔外科を受診した。

現 症: 体格、栄養ともに中等度で全身的に特に異常は認められなかった。口腔内所見では 54 相当部舌側歯

写真1 初診時口腔内写真

431|123 は残根状態で 54 相当部舌側に瘻孔がみられる。

肉に直径約2mmの瘻孔が認められたが、浸出液はなく周囲に炎症所見はみられなかった。上顎は無歯顎で下顎は 431|123 が残存し、すべて残根状態であった(写真1)。

X線写真所見 51 相当部に埋伏歯がみられ、その歯冠を含み類円形のX線透過像が認められた。また埋伏歯の近心に近接して歯牙様の不透過物が認められた(写真2)。

臨床診断: 右下顎臼歯部濾胞性歯嚢胞および歯牙腫。

処置および経過: 平成元年9月、局所麻酔下に残根状態の歯をすべて抜歯した後、31 近心から61 相当部

弘前大学医学部歯科口腔外科学教室

(主任: 鈴木 貢教授)

Department of Dentistry and Oral Surgery,
Hirosaki University School of Medicine (Chief:
Prof. Mitsugu Suzuki)

受付日: 平成2年11月20日

の歯槽粘膜を剥離し、4] 遠心部骨を削除すると歯牙腫様の石灰化物が認められた。周囲の骨を削除し石灰化物を摘出し、さらに一層の骨を削除し嚢胞を一塊として摘出した。また同時に埋伏歯の抜歯も行った。次に舌側の瘻孔周囲の歯槽粘膜を切除、搔爬して縫合した。術後経過は良好であった。

摘出物所見：石灰化物は2個認められ、表面はやや凹凸不正黄白色で、硬度は歯牙様硬であった。嚢胞は壁の厚さが3～5mmで内容液は認められず、埋伏歯は2]の形態を有していた(写真3)。

病理組織所見：H-E 染色組織標本において、嚢胞壁は上皮層と結合組織層からなり、上皮層は一部で欠落がみられた。上皮層は重層扁平上皮からなり、結合組織層との境界は不正であり、一部に角化傾向が認められた。結合組織層は形質細胞を主とした著しい炎症性細胞浸潤

を伴う肉芽組織であった(写真4)。

以上の所見から、2] 濾胞性歯嚢胞ならびに集合性歯牙腫と診断された。

赤外線吸収スペクトル：埋伏歯の象牙質と歯牙腫の赤外線吸収スペクトルを日本分光社製フーリエ変換赤外線分光光度計(FT-IR 7000)を用い測定した。図1に埋伏歯と歯牙腫の赤外線吸収スペクトルを、図2に埋伏歯と骨牙腫の赤外線差スペクトルを示す。歯牙腫では、埋伏歯に比較し $1,670\text{ cm}^{-1}$ に示されるアミド I および $1,430\text{ cm}^{-1}$ に示される CO_3^{2-} の吸収が強く、また $1,050\text{ cm}^{-1}$ と 600 cm^{-1} に示される PO_4^{3-} の吸収が弱

写真2 初診時パノラマX線写真

5] 相当部に埋伏歯の歯冠を含む透過像とその近心に不均一な不透過像が認められる。

写真3 摘出物

2] の形態を有した埋伏歯の歯冠部を取り囲むように嚢胞があり、その近心に近接して歯牙腫がみられる。

図1 歯牙腫と埋伏歯の赤外線吸収スペクトル

図2 歯牙腫と埋伏歯の赤外線差スペクトル

写真4 嚢胞壁の病理組織像(H-E染色)

嚢胞壁は肥厚し、重層扁平上皮と著しい炎症性細胞浸潤が認められる。

く、石灰化の程度が低いことが示唆された。

考 察

濾胞性歯嚢胞は歯原性嚢胞のなかで歯根嚢胞について発生頻度が高いとされているが、ときに歯原性嚢胞の壁に歯牙腫組織の存在することがあり、歯牙腫を伴った濾胞性歯嚢胞などとして報告されている¹⁾。Gorlinらの報告した石灰化歯原性嚢胞²⁾と歯牙腫とが共存した症例は、本邦では28例の報告があるが、濾胞性歯嚢胞と歯牙腫の共存した症例は、われわれが渉猟した範囲で本邦では11例報告されている³⁻¹³⁾。濾胞性歯嚢胞および歯牙腫が発見されるのは若年者に多い^{1,14,15)}とされているが、本症例は84歳と高齢であった。好発部位に関して濾胞性歯嚢胞と歯牙腫は、下顎では臼歯部とされており、両者が共存した症例においても下顎臼歯部が多数であった。発生原因は歯牙腫では外傷、炎症、歯胚の圧迫、および遺伝的因子などが考えられ¹⁾、濾胞性歯嚢胞では外

傷、歯胚に働く圧迫、機械的刺激、乳歯病巣の波及などが考えられている¹⁶⁾。濾胞性歯嚢胞と歯牙腫の発生原基に関しては、検索症例11例中5例は同一原基であり、3例は別個の原基であり、また残り3例は不明であった。

滝川ら¹⁷⁾が複雑性歯牙腫の35例中17例に埋伏歯がみられたと報告し、久野ら¹⁸⁾が複合性歯牙腫52例中の62.9%に埋伏歯が認められたと報告しているように、歯牙腫が埋伏歯を伴う症例は比較的多く認められるが、それら埋伏歯が濾胞性歯嚢胞を引き起こす症例は少なく、またその原因については必ずしも明らかではない。歯牙腫を伴った石灰化歯原性嚢胞に関してはその発生由来について、歯牙腫の発生途上で上皮の嚢胞化が生じ、石灰化歯原性嚢胞が発生するという説や、石灰化歯原性嚢胞が先に発生し、嚢胞壁の組織誘導により歯牙腫が発生するという説が考えられているが¹⁹⁾、歯牙腫と濾胞性歯嚢胞の共存症例については、歯牙腫の形成途中で歯原性上皮が増殖し嚢胞化すること、あるいは隣接する個別の原基から発生することなどが考えられる。

本症例の場合、歯牙腫と濾胞性歯嚢胞は近接していたが一層の骨を介し個々独立して存在しており、同一原基よりの発生の可能性は少ないと考えられた。濾胞性歯嚢胞は「5」相当部に存在していたが、嚢胞に含まれていた歯は「2」の形態を有しており、これは歯牙腫の発生原因とともに考えあわせると歯胚形成期に何らかの外力加わり「2」の移動が起こり、同時に歯牙腫が発生したとも推察された。あるいは、移動し埋伏した「2」が歯牙腫に近づき、機械的刺激や圧迫が加わり嚢胞化したとも推察された。以上から、歯牙腫の原基は、「5」相当部の歯胚であり、濾胞性歯嚢胞の原基は、「2」である可能性が高いと考えられた。

歯牙腫における硬組織の形成量は歯の成熟度によって異なる¹⁾とされているが、歯牙腫に関する生化学的組成分析の報告は少ない。今回の症例では歯牙腫の赤外線吸収スペクトルによる分析を行い、その結果アミドの吸収

が強く、また PO_4^{3-} の吸収が弱いことより歯牙腫では、埋伏歯に比較しタンパク質成分が多く石灰化の程度が低いことが示唆された。

結 語

1. 今回著者らは、濾胞性歯嚢胞と歯牙腫が共存した症例を経験したので文献の考察を加え、その概要を報告した。

2. 濾胞性歯嚢胞は、移動したと思われる下顎右側切歯の歯冠を含んでいた。歯牙腫は集合性歯牙腫であった。

3. 歯牙腫の赤外線吸収スペクトル分析で埋伏歯に比較し、タンパク質成分が多く石灰化の程度が低いことが示唆された。

引 用 文 献

- 1) 石川梧朗監修：口腔病理学Ⅱ，改訂版，永末書店，京都，1982，507-512頁。
- 2) Gorlin, R.J., Pindborg, J.J., et al.: The calcifying odontogenic cyst—a possible analogue of the cutaneous calcifying epithelioma of malherbe. An analysis of fifteen cases. *Oral Surg Oral Med and Oral Path* 15: 1235 1962.
- 3) 安藤正一，尾沢光久，他：一顎中に濾胞性歯嚢胞と歯牙腫が連接していた症例。歯界展望 18: 734-735 1946.
- 4) 岡本 治：2ヶの濾胞性歯嚢胞とオドントームを含む稀有なる症例。臨床歯科 192: 37-40 1951.
- 5) 北村実雄，島田 孝：歯牙腫と濾胞性歯牙嚢胞が相接して発生していた症例について。歯科学

- 報 52: 103-108 1952.
- 6) 島田宗武，橋本 榮，他：上顎前歯部に歯牙腫と2個の濾胞性歯牙嚢胞とが相接して発生していた1例。歯科学報 57: 118-122 1957.
 - 7) 滝 義孝，藤巻則治 興味ある病理組織像を示す複合性歯牙腫を伴った濾胞性歯牙嚢胞の1例(抄)。口科誌 14: 89 1965.
 - 8) 常葉信雄，広瀬達男，他：歯牙腫と共存したと思われる含歯嚢胞の1例(抄)。日口外誌 19: 714 1973.
 - 9) 児玉 昭，平田秀一，他：歯牙腫と濾胞性歯牙嚢胞の合併した1例。日口外誌 24: 99-102 1978.
 - 10) 本田富雄，赤井元芳，他：興味ある複合性歯牙腫の3例について。大労医誌 4: 135-139 1980.
 - 11) 大村 光，高井 宏，他：Cystic Odontomaの1例(抄)。東北歯大誌 10: 244 1983.
 - 12) 山本英次，渡辺尚海，他：Compound Odontoma と Follicular Cyst が相接して発生していた1例。小児歯誌 23: 1026-1033 1985.
 - 13) 平本隆介，石橋克禮，他：両側下顎臼歯部歯牙腫ならびに1側には濾胞性歯嚢胞を合併した例。日口外誌 35: 1332-1337 1989.
 - 14) Regezi, J.A., Kerr, D.A., et al.: Odontogenic tumors; Analysis of cases. *J Oral Surg* 36: 771-778 1978.
 - 15) 樋口勝規，中村典史，他：歯牙腫の臨床病理学的検索 その1 臨床像の検討。日口外誌 36: 622-626 1990.
 - 16) 石川梧朗監修：口腔病理学Ⅱ，改訂版，永末書店，京都，1982，372-377頁。
 - 17) 滝川富雄，高沢延幸，他：上顎に生じた複雑歯牙腫の2例。日大歯学 45: 1-7 1971.
 - 18) 久野吉雄，比嘉実盛，他：複合歯牙腫26例の臨床的考察。18: 405-410 1972.
 - 19) 松井澄子，道脇幸博，他：歯牙腫を伴った石灰化歯原性嚢胞の2例とその文献的考察。日口外誌 34: 2223-2230 1988.